

## 一斉読書

10月21日（日）2校時、全校で一斉読書（本は学級毎）を行いました。児童生徒の感想（一部抜粋）は以下のとおりです。

### G1 『アレクサンダとぜんまいねずみ』

ぼくは、からふるなとかげがでてきたところがこころにのこりました。ねずみのアレクサンダがいしを見つけたけどゆずったところがすてきだなんておもいました。

### G2 『こいぬをむかえに』

わたしは、ふうちゃんが、こいぬの「にい」をゆずったことが、とてもえらいと思いました。だって、ふうちゃんだって「にい」をあげたくなかったでしょうから。それでも、ちゃんとがまんして、一ぴきあげたのがとてもえらいと思いました。また、そうちゃんが、ふうちゃんとのやくそくをまもって、とてもかわいい名前「タム」にしたのがとてもいいと思いました。

### G3 『花さき山』

花さき山にさく花は、人々のやさしさや、がまんしたことの全部が、一つ一つの花に入っているんだと思いました。

これまで私は、やさしくなくていいんじゃないか、と思ったことが何回かあります。しかし、この本を読んで反せしました。今からでもおそくないので、あやさんのように、やさしく明るくがんばって、花をさかせていきたいです。

### G4 『山のいのち』

私は、静かな静一を祖父が変えてくれたんだと聞きながら思いました。自然の中で自分の力で生き、でも人間に食べられてしまうそんな生き方の動物もいます。けれど静一は、つらい気持ちを少しでもわかってくれて、何かを感じさせてあげようとしている祖父が、あこがれの人になったんだと思います。海・川・森などの自然は、自分で動けなくても気持ちはあると思います。そんな気持ちが「山のいのち」には、書いてあります。そのことを分かり合えることは、大切だと気づきました。私は静一の祖父に、ものづくり、山の自然、動物たちのいのちについて教えてほしいと思いました。少しでも自然と人間が近づけたらいいと思います。そのためにも、自分にできることをしていきたいです。

### G5 『思うは招く』

私は、植松さんの生き方はすばらしいと思いました。なぜなら、この人はたくさん迷ったことがあったのに、それを全部乗り越えてきたからです。

私の夢は、ようち園の先生になることです。今までは、夢に向かって、小さい子の世話をしていましたが、これからは子守だけではなく、子どもに何か教える練習もしたいと思います。そして、この練習に困ってしまったら、「努力したってむだだ」と思わないで、「だったらこうしてみたら」と思いながらがんばりたいです。

## G 6 『注文の多い料理店』

ぼくは注文の多い料理店を読んで印象に残ったところは、「きよろきよろと青い目玉がこっちをのぞいている」や「ナイフを持って舌なめずりをしてお客さんを待っている」という場面です。読んでいると、おそろしさが伝わって、自分がその部屋にいて、二人の若い紳士になっておびえているようです。この後、二人はどうなってしまうのか、どんどん吸い込まれるように読み進めていきました。「紙くずのように」というのにはおどろきました。顔がくしゃくしゃになるなんていうのは、初めて聞きました。独特な表現で、ぼくはどんな顔かよく分かりませんでした。

宮沢賢治は人間が人間らしい生き方をする社会になってほしいと言っていました。だから、おそろしい場所に行った時の人間の正直な気持ち、例えば「顔をくしゃくしゃにして、がたがたふるえ、ものも言えなくなる」といった表現をこの物語で書いたのかな、と思いました。

宮沢賢治のもう一つの夢は、動物や植物と気持ちを通わせることでした。「やまなし」など、ほかの作品も宮沢賢治の夢と関係性があるのかなと思いました。

## G 7 『羅生門』

私は初めて羅生門を読みました。私がこの作品を読んで思ったことが2つあります。

一つ目は、老婆が髪の毛を抜く理由が怖いということです。人間の恨みの気持ちやひがみの気持ちが老婆の言葉から伝わってきました。今にも共通するところはあると感じました。二つ目は、下人の心変わりが怖いということです。最初下人は盗人になるか、餓死をするかと聞かれたら、餓死を選んでいたのに、老婆に出会った後に、盗人の道を選んだことが印象的でした。この物語で特に印象に残ったのは、下人の心変わりです。自分が生き残るために、盗人の道を選んだ下人の様子が、人間の心情を生々しく描いているようで、最後の場面は少し怖いと感じました。でもこの作品に出てきた二人の心情の様子から、人間をよく見ていると思いました。

## G 8 『ひとにぎりの未来』

三人の内誰が殺されるのかドキドキしていたが、結局仲良くなるという結末に驚いた。私の予想では、三十分の中で少しずつ話がまとまっていき、一番初めにまとまったペアが一人を殺し、二人の内の一人がもう片方に殺され、一人で全ての金を手に入れると思っていた。しかし、結局見張りがいらなくなって、だったら三分でいいかと急に心変わりしてしまった。私的には、そんなすぐに金の意欲がなくなるものかと不思議に思った。

AもBもCも、金をもっと欲しい気持ちから、一人を殺そうと思い、悪口になっていき、自分が生き残るための手段を考える。初めは金目的だったのに、裏をかいてどんどん目的が変わっていく所が予想外で、流れがあっっておもしろいと思った。三人とも話の初めから終わりまで同じようなことを考えていたので、最後の方にあったように、三人はいいグループだと思った。また、この三人のグループから、六年間一度も仲間割れしたことがない私の親友二人を思い出した。

## G 9 『我が志アフリカにあり』

私はアフリカと聞くと、汚い街や民度の低い人々のことを想像します。この本では、アフリカのザンジバルという聞いたこともないような地で日本人が漁師をしていると書かれていました。最初はなぜそんなことをしているのか

全くわからず、奥さんの苦悩が描かれている箇所ばかりに共感していました。しかし、読み進めていくうちに島岡さんの考え方、生き方を尊敬していききました。島岡さんが漁を始めて半年した頃のエピソードに、ムカンガーたちとすれ違いが起こったというものがありました。日本人のやり方が通じず、反発するものが出てきたそうです。私は海外に住んでいるので、日本と同じようにふるまっても相手が外国人というだけで全然自分の想像通りにならなかったんだろうなとわかりました。しかし、ここで島岡さんはあきらめなかったからすごいと思います。また、なぜそうなのかという原因をきちんと探し、向き合う姿勢には尊敬しました。他に私が衝撃を受けたのは、「レインコートが敗れる理由」のところで起こった出来事です。島岡さんの渡したレインコートが次々破れる理由が貧困による教育不足にあったという部分を読んで、なんとも言い表し難い気持ちになりました。やはりアフリカの国はこういう背景があるがために人々の民度もなかなか上がりにくい状況にあるのだらうと思いました。だから、それを変えようとしている島岡さんのめげない、くじけない精神には彼らを変えてみせるという強い信念が感じられました。今回これを読んで、アフリカという私にとって未知な世界のことを知ることができました。

